

2006. 3. 25

No.138

編集 樋口 みな子

E-mail
minginga@agate.plala.
or.jp
郵便振替
「銀河通信」02740-7
-56535



春の足音

3月の末というのに雪解けが遅く、我が家の庭には雪がまだたっぷり残っています。それでも春の足音は確実に近づいていて、遠くの森は茶色から薄い緑に変わってきました。

息子が無事に高校を卒業しました。夫婦で式に参列しました。小さな高校ならではの手作りの温かみが伝わる素敵な卒業式でした。卒業証書は2枚。1枚は高校からですが、もう1枚は担任の先生が渾身の力で何日もかけてひとりひとりの生徒の長所を誉め、はなむけの言葉が綴られていました。受けとる生徒たちは、K校長先生と握手したり、肩を抱き合ったりとさまざまなパフォーマンスで喜びを表現していました。祝賀会では在校生によるプラスアンサンブル演奏や、卒業生によるパワーポイントを使ってのスクリーン発表などで楽しませてくれました。さまざまな行事での生徒たちの生き生きとした姿が映し出され、1年生のときから格段に成長した息子を確認でき感無量でした。息子は4月から、札幌市内の大学の共生科学部で学ぶ予定です。

私も場当たり的な生活から脱却して、高山植物の勉強もしながら自然保護の運動に力を注ぎたいと思います。

山の技術もレベルアップしたいし、体力を保ち続けることも課題です。

銀河通信の発行も18年になります。読者の期待に応えられるような中身だろうかと悩みながら発行しています。ご愛読いただけたら嬉しいです。



3月18日から20日まで道北の分水嶺踏査で、上豊神峠からイソサンヌプリまで歩いている途中で出合った奇妙な光景です。

写真は、ダケカンバの大木の枝が分かれたところにトドマツ2本生えてるのがわかりますか？

厳しい自然の中で幼木がたくましく育つ姿に感動しました。

風にも負けず、 雪にも負けず・・・

イソサンヌプリ踏査報告

L 長谷川雄助 S L 鈴木貞信 鈴木美紀
樋口みな子 サポート小栗 宏

3月18日から山中2泊3日で、イソサンヌプリの分水嶺踏査を行った。昨年5月2日から4日まで同じメ

ンバーで知駒峠からイソサンヌプリまで往復し踏査したルートの北、上豊神峠までの分水嶺を今度は、上豊神峠から南下してイソサンヌプリに達し、そのまま知駒峠へ抜けようという約30kmの長距離踏査です。

6時40分札幌発。高速道路を利用し、10時半、ピンネシリ温泉に到着。一足早く着いた帯広からの田島祥光、助田陽一、梨枝子パーティ(道道84号線峠から上豊神峠までの踏査)、私たちのサポートの小栗宏さんと合流する。そこに漆崎隆、裕子、中村喜吉、鈴木和夫パーティ(道道138号線から84号線までの踏査)を送ってきたサポート掛水孝幸さんが現れて、送ってきた様子を聞く。今回、支部が送り出した3パーティ同時展開踏査で、道北分水嶺未踏査部分を一気に繋ごうという計画です。



田島パーティとの下山する地点と時間を地図で確認して、2台で出発。途中でお互いの健闘を誓いながら別れ、私たちは上豊神林道終点に向かい最終人家に車を駐車(田島パーティはこの車でピンネシリ温泉に帰ることになる)。

12時半、身支度を整えスノーシューで出発した。ぼかぼか陽気で快適に進む。長い林道と小さなアップダウンを繰り返し、ようやく分水嶺に乗ったのは16時。

稜線を進んで行くとダケカンバの大木の枝の上にトドマツの幼木が育っていて、厳しい自然環境の中でのたくましい生命力に感動しました。

目指すイソサンヌプリがはるか彼方に白く輝いていました。17時20分、風のあたらないコルでテントを張る。鈴木SLがザックから出したビールで乾杯。ことのほかに美味しい。豚しゃぶの豪華な夕食で満たされ、翌日の天気祭りをして就寝。

19日、3時半起床。穏やかな天気で安堵する。分水嶺はいくつもの支尾根に分かれていて、長谷川L、鈴木SLが何度も地図とGPSで確認しながらいくつもの高みを乗り越えていく。ラッセルのトップを行くとき、私は「まるで天国への階段を登っているようだな」と思いながら空に向かって歩を進める。ザックがずっしりと重い。足のつま先がじんじんと痛い。顕著に高い山があるわけではないだけに、分水嶺を見極めるのはとても難しい。11時10分356.5mの三角点に到着した。この日はできるだけイソサンヌプリまで近づこうと12時間歩いた。

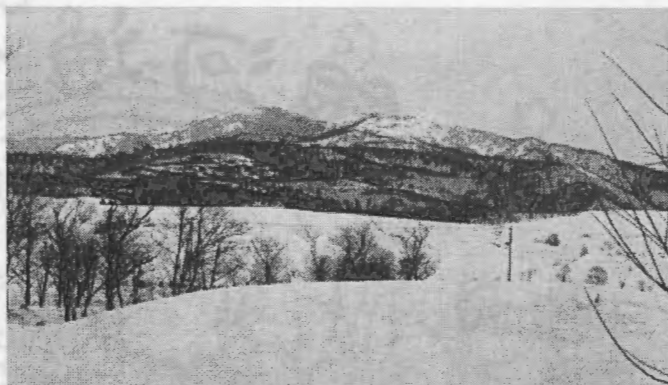
道北の分水嶺をなんとか3パーティでつなぎたいとの、みんなの思いがひしひしと伝わってきました。

エゾ鹿やウサギの足跡は確実に分水嶺を辿っていてその習性に感心したり、倒木の巨大な根に雪が積もった姿がまるでチセのようで、自然の造形美に心がなごみました。

17時25分テント場。夜半から電車が通過するような風の音が聞こえ、テントに雪が当たる。

20日、7時35分出発。吹雪で視界が悪い。今日はいよいよ昨年5月に登ったイソサンヌプリとの再会である。テント場からすぐの急斜面を、鈴木美紀さんと私とで交代でラッセルしながら進む。強風で何度も吹き飛ばされそうになる。イソサンヌプリは、やすやすと私たちを通してはくれない。尾根に取り付く急斜面で、叩きつけるような強風に煽られてずり落ちる。私は振り落とされるのではないかという恐怖感で、一瞬足がつって動けなくなった。鈴木SLから「小枝に掴まれ」と指示が飛ぶ。わずかの油断も許されない。「慌てるな」と心に言い聞かせ5メートル位のナイフリッジをやっと乗こした。9時14分。

9時34分、4人そろってイソサンヌプリの頂上に立った。三角点標柱にタッチして分水嶺を繋いだ。頂上では昨年のような素晴らしい眺望はなかったがお互いに硬い握手を交わし、記念撮影をして知駒峠を目指し下山した。アイヌ語でイソは狩の獲物とも、波かぶり岩ともいい、サンは、山から浜に出るとか、山から浜に吹き降ろす風とかの意がある。地元では、獲物が多くいる、生まれ出る山と解釈されているようだ。





イソサンヌプリの頂上標柱を囲んで、昨年の踏査ルートに繋がったことを喜び合いました。

相変わらず横殴りの風雪とガスで視界が悪い中、私は一瞬立ち止まったときに、あっという間に吹き飛ばされて転倒。やっとの思いで立ち上がった。長谷川さんから「ストックを使ってしっかり踏ん張れ」と激が飛ぶ。転んで体力を消耗しないことの大切さを学んだ。小さなアップダウンを繰り返して、14時40分知駒峠に到着した。峠では小栗サポーターと北側の分水嶺を踏査してきた田島パーティの3人が笑顔で出迎えてくれ、感激もひとしお。イソサンヌプリ3日間の踏査を終えました。

激しい風雪の中を歩き通し、森林帯に入ってホッと一息つきました。あと2時間で終着の知駒峠です。



写真、鈴木貞信さん、長谷川雄助さん

今回は久しぶりの縦走登山。全く不安がなかったわけではありません。近くの森林公園で7キロのザックを背負い、スキーでアップダウンを歩いて予行演習をしました。

3日間も歩きとおすには余裕のある登山靴がベターです。私のつま先が靴にあたって痛みました。

林道6.5km、分水嶺15.0km。昨年踏査済み分水嶺8.6km。合計30.1kmを歩き通しました。アップダウンもあり、3日目、3月20日はホワイトアウトの中の登山も経験しました。

白老岳と西昆布岳に登りました。

2月18日、山の仲間のI山荘雪下ろしに行くついでに白老だけの870Mピークまで登りました。朝のうちは吹雪いて温泉に行くしかないかなとあきらめかけましたが、8時過ぎ晴れ間が見えてきてganさんの提案で白老岳のポコまで行こうということになりました。国道に車を置き山スキーの装備で出発。1時間半で870mピークに着きました。白老岳と南白老岳がりんとした姿で迎えてくれました。

その後I山荘の雪下ろしに10数人が参加。私はまかない隊で食事作り。楽しいひとときでした。私やIさんを含めて団塊の世代のメンバーが多く、共通の話題で盛り上がりました。

翌日は、Iさんら山岳会のメンバーの案内で西昆布岳に登りました。広い牧場がのびやかで皆は早いペースで進みます。私は今年初めての山スキーで、なかなか自分のペースがつかめず苦勞しました。11時35分出発から2時間半で西昆布岳に着きました。樹林はそんなに密生しておらず快適でした。

白老岳の頂上



西昆布岳を目指して

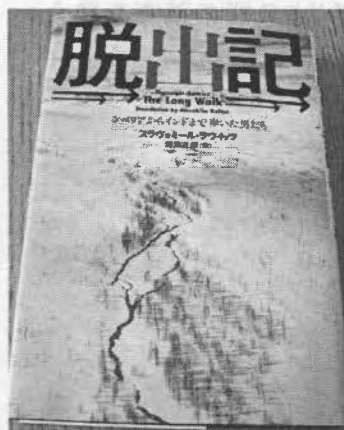
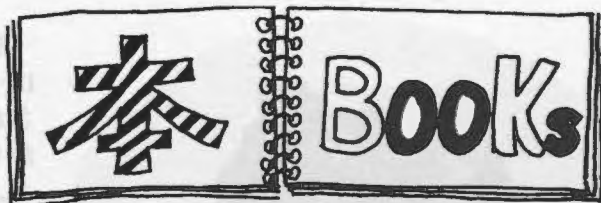


写真は、仲俣善雄さんからの提供です。ありがとうございました。

『脱出記』

シベリアからインドまで歩いた男たち

スラヴォミール・ラウイツ 海津正彦(訳)
ソニーマガジズ 2200円+税



第2次世界大戦さなかの1941年、ポーランド陸軍の中尉だった著者はソ連によってスパイに祭り上げられ、シベリアの強制収容所に流されます。25歳のラウイツは、強制労働25年間も酷寒の地で暮らし朽ち果てたくはないと、意を決して6人の仲間と脱走するのです。バイカル湖の沿岸を出るまでは寒さとの闘い。モンゴルに入って温かな人々に接したのも束の間、食料も水もない状態で、ゴビ砂漠に突入。過酷な旅に耐え切れず死んでいく者も。チベットを過ぎヒマラヤを越えるのは並大抵のことではない。彼らの自由になりたいとの一念と、深い絆で結ばれた友情に何度も胸が熱くなりました。あらゆる知恵と体力、技術を駆使して収容所を脱走した7人のうち4人がインドにたどり着き、1942年4月、イギリス軍に保護されたのです。

自由を求めた不屈の精神に感動しました。読み終えた時、私もシベリアからインドまで6500キロの脱出行を共に体験したような気持ちになりました。

翻訳者も登山家であり、臨場感あふれる描写に引き込まれ、一気に読み終えました。長い長い分水嶺踏査への思いと重なり、私の今年読んだ本ベスト1のノンフィクションでした。

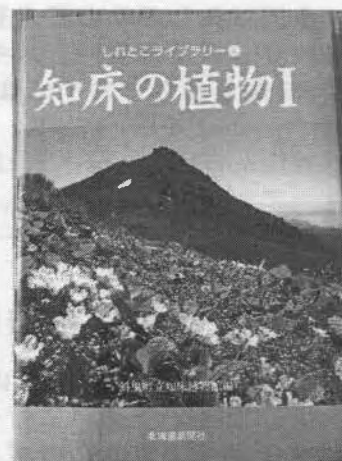
『知床の植物1』 しれとこライブラリー

斜里町立知床博物館編 北海道新聞社 1800円+税

昨年は知床が世界遺産に指定され、たくさんの観光客が訪れました。知床の原始の自然を守りたいものです。筆者のひとりである佐藤謙先生は高山植物保護への提言として、たくさんの価値基準を重ね合わせて自然を観ること、植生自然度の根底となる植生の分布図や、絶滅危惧種植物の分布図ではなく、地域ごとに判断される希少植物を加えた、種類ごとの分布図を重ね合わせてみて欲しい、自然を複層的に観て欲しいと書いています。

メアカンフスマやシレットコスミレの保護にとって、その減少原因を追究するには、モニタリングの必要性を強く訴えています。

私は日本山岳会の山の環境ネットワークで高山植物部会長を受け持つことになり、勉強しなくてはなりません。今年は是非とも植生調査に参加したいと考えています。



購読料をありがとう 05・12・28~06.3・24

疋田英子(稚内市) 北芝梅子(京都市) 泉恵子(札幌市) 今野平支郎(札幌市) 助田梨枝子(芽室町) 佐々木純一(雨竜町) 小枝正人(札幌市) 伊藤泰弘(札幌市) 河村健(札幌市) 大友芳博(札幌市) 大西一郎(伊達市) 上幸雄(小平市) 千葉朋代(札幌市) 久能由弥(江別市) 佐藤守(札幌市) 江部靖雄(札幌市) 朝日守(旭川市)
カンパも含めての方 佐藤民枝(札幌市) 3,000円 新妻徹(札幌市) 5,000円 吉岡真喜子(夕張市) 3,000円 井上昌和・浅川身奈栄(札幌市) 4,000円 角田慶子(札幌市) 3,000円 笹島秀則(様似町) 4,000円 星原信之(札幌市) 5,000円

水野隆夫(今帰仁村) ニラカナイの海カレンダー

総額52,500円は印刷、送料に使わせていただきます。ありがとうございます。

さまざまな行事に連われて銀河通信の発行が遅れました。紹介したい本などありましたら情報をお寄せください。

『ブーベの恋人』

カルロ・カッソーラ著 菅谷誠訳 星雲社 1900円+税



「ブーベの恋人」を観たのは35年も前のこと。高田馬場の安い名画劇場でした。新聞で舞台になったトスカーナの地が紹介されていました。哀切な音楽と共に、レジスタンスに情熱を燃やした青年と、マーラとの恋が描かれ、主演したクラウディア・カルディナーレの美しさが印象的でした。原作を読んで、ブーベ初めて出会ったマーラがまだ16歳の少女であったことも驚きでした。貧富の格差に怒り、自由で平等の世界を願ってパルチザンに加わり刑務所に入れられたブーベ。社会的背景も改めて知りました。そんなブーベを何年も待ち続けたマーラのひたむきな愛は今もなお新鮮でした。

季刊誌『ファウラ』 特集 北海道固有の花 編集・発売 ナチュラルー 1000円

植物写真家の梅沢俊さんから紹介していただいた季刊誌です。世界中で北海道にだけ咲き、特定の限られた場所にしかない花の多くは一般にはなじみのない良く知られていないという。しかも絶滅の危機に瀕している。特集のトップを飾ったのはカムイビランジ。日高の断崖絶壁にへばりつくように可憐に咲いています。私の山の技量では一生見ることはできないかもしれません。是非、見たいと思ったのがチトセバイカモでした。水中に咲いている可憐な花です。どうやって根を張ることが出来るのだろう。岩と岩との間に根を張るのだろうか？不思議な1枚の写真に惹きつけられました。



限られた地域で、細々と生活する固有種。気の遠くなるような旅をして、体のつくりまで変化させて生き延びてきた固有種。途絶えさせてはならないと、メアカンキンバイやユキバヒゴタイなどの写

真から伝わってきます。アポイ岳の植物を駒井千恵子さんが、北海道固有植物が生じた理由を佐藤謙さんが書いています。北海道の素晴らしい自然を知るには最適な本です。

頼りないですが、よろしくお願いします。

北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会では、昨年大きなシンポジウムを開き、各地の山で高山植物を守るためにパトロールや登山者への啓蒙活動などさまざまな取り組みが報告されました。私も初めての司会や資料作りなどで微力ですが頑張りました。2月に代表者会議があり、いままで頑張ってくれた長谷川雄助さんに代わって私が事務局長を引き受けることになりました。日本山岳会の自然保護副委員長でもあり、今年は頼りないけれど、理論的なことも学びながら頑張りたいと思います。



また日本山岳会では、山の利用者として一方的に山から恩恵を受けるだけでなく、愛する山がいつまでも美しく豊

かであるように自らもできる努力をしなければならないという主旨で、自然保護委員会の大きな柱として「山の環境ネットワーク(山環ネット)立ち上げました。

2月28日に自然保護委員長の山川陽一委員長と舟根章さんが来札され、北海道の高山植物保護活動の状況などを支部長と新妻徹さんと話し合いました。山のトイレや登山道、ツアー登山、適正利用などの部会で私は高山植物部会を担当することになりました。全国にインターネットで情報を伝え、各地との意見交換、実践活動をしていきます。回りの人たちに助けをもらいながら努力したいと思います。

映画

映画紹介

ニキ・カーロ監督

スタンドアップ

ヒロインの勇氣に感動

夫の暴力に疲れ果て、郷里のミネソタに帰郷したヒロイン、ジョージが、2人の子どもを育てながら、鉱山に就職します。女性は一握り。そこでは、想像を絶するセクハラ、いじめ、嫌がらせや言葉の暴力があふれていました。



生活のために泣き寝入りを決め込む女性の中で、敢然と立ち向かうヒロインの勇氣に胸が震えました。「私は、ただ人として当たり前に働き生活したいだけ」と立ち上がるのです。生活に困窮する娘に、そつとお金を渡す母。「俺の金をドブに捨てる気か」という父に、「私も家事をやっている」と母が家を出ます。娘をやっかいものを扱いしていた父が変わります。鉱山労働者の前で、父は初めて娘の弁護をします。

過去も暴かれ、思春期の息子は荒れて家出します。ひどいことをされて、あなたを生みたくなかった。でもあなたの鼓動を聞いたとき、私だけの子もだつて思ったのよ。息子に語りかけるジョージは毅然としていて、母としての愛情が胸を打ちます。裁判が進む中、ジョージの勇氣に一人、また一人と立ち上がります。

裁判が終わったのが1998年。ついこの間まで、こんなひどい女性差別があったことに驚きました。たった一人から始まった勇氣ある行動が周りを変え、女性の人権を守る歴史を作ってきたことを教えてくれました。主役のシャリーズ・セロンが、毅然として素敵でした。ニキ・カーロ監督も女性です。

(樋口みな子)

「天空の草原のナンサ」 監督 ビャンバスレン・ダバー ドイツ

広大な草原で暮らす遊牧民の家族と犬をめぐる物語。

私も一緒に寝転がって、空を見上げ、少女たちと一緒に草原を走っているかのようなおおらかな気持ちになりました。

遊牧民の、自然と一体になって生きる、無駄のない暮らし方に本当の豊かさを教えてもらった気がします。6歳の少女も働き手なんです。必要最小限の生活用品。時間はゆったり流れるけれど、なんと濃密な時間を生きていることか。

子ども3人の表情も生き生きしていて、おもうわず、頬が緩んでしまいました。

パオを解体して、別の地に移動するシーンに、私もモンゴルの風を感じながら旅する楽しさを味わいました。パオの解体は、家族みんなで行うのですが、その合理的な作りに驚きを感じました。

もうひとり?の主役、野良犬のプチの名演技も、なんとも愛らしかったです。



『単騎、千里を走る』

監督 チャン・イーモウ 中国



昔から、無口で渋い高倉健のファンです。やくざは好きじゃないけど、何故か高倉健のやくざは許せちゃう！と言うくらい。

中国を舞台に、息子が研究していた仮面劇を父である高倉健が追体験していくロードムービーでした。寡黙であるために、息子と心通わせることができなかつた父と、父の顔を知らない、中国の辺境に住む8歳の少年との交流が、すごく良かったです。やんちゃな少年が、言葉は通じないけど、親子のように心を通わしていく過程で、息子の気持ちを理解して

いくのでした。

広大な中国の九十九折の山道を、がたがたとトロッコ?のような荷車を転がして旅するのも面白かったです。

『白バラの祈り』 ソフィー・ショル、最後の日々

監督 マルク・ローテムント ドイツ

1943年、ヒトラー政権末期。ミュンヘン大学で学ぶソフィは、兄と半ヒトラーと戦争終結を呼びかけたピラをまいて、ゲシュタポに逮捕されます。

音楽を愛し、青春を謳歌していた21歳の普通の21歳のソフィは、ヒトラーの非人間的な政策に、最後まで屈することなく抵抗するのです。

最初は、恐怖に怯えていたソフィが、ナチスには絶対に屈せず、勇気を持って立ち向かう姿が、美しく知的でした。

命をかけて闘った小林多喜二を思い出しました。私に死を賭しても信念を貫き通せるだろうかと、何度も問いかけて心揺さぶられました。

死を迎えて、兄と友人と抱き合うシーンと、両親と静かに別れを惜しむ情愛に胸が締め付けられました。

空をみつめて「太陽は輝き続ける」と言い残すソフィの目は澄み切って、流れる涙を抑えることができずでした。

いつも空をみつめるソフィー



がんばれ、ピンク

村上康成さん、北海道の川と魚を語る



3月17日、「未来の子どもたちにサンル川とサクラマスを残そう」という講演を聞きました。お話したのは絵本作家の村上康成さん。サクラマスのピンクを主人公にした絵本で国際賞をとりました。

村上さんは、絵本にありえないことも描いたと話し始めました。ピンクと恋人のパールが産卵するために意を決して百メートルくらいの高さがあるダムを飛び越えるところです。絵本には人間の潜在意識や能力、見る側の内なるエネルギーを奮い立たせる力があります。

毎年のように北海道に遊びに来ていますが素晴らしい自然があります。サンルダムの計画を聞きました。釣りに行くと北海道の川でもあちこちで砂防ダムを見ます。何でこんなところに必要なんだろうと思う沢に砂防ダムが10も15もあります。最近、川に子どもの姿が見えません。川は楽しいはずの環境なのに残念です。最近出した絵本「カッパがついてい r y」にはそんな状況になってしまった川への自分にできる感謝の思いを描きました。何よりも大好きな川にいつまでも健康で居て欲しい。個人個人が何かを思って行動していかなければ不要なダムの建設など行政の思いのままになってしまいます。サンルダムに反対の声をあげていかなければと思います。と講師の村上さんが語りました。

お便り

新年早々「銀河通信」No.137号をご送付いただき誠にありがとうございます。楽しく一気に読ませていただきました。

分水嶺踏査94.4kmは仰天するほど、北海道の方はスケールが大きいのにいつも驚かされます。昨年12月、支部創立40周年記念式典に参加できたことを喜んでいきます。

年末年始に予定した遠方への山行を取り止め、近場の富士写ヶ岳(942m)に登り頂上にテントを張り新年を迎えました。登りは途中で引返した2人組みの踏み跡をたどり、少しは楽をしたのですが、あとはラッセル。頂上付近の木々は、凍りついた雪の大きな塊が付着して頭をたれ、お化け屋敷のようでした。山頂は5m位の雪にすっぽり覆われ、薄暮の到着でした。

福井から金沢の日本海沿岸の街の夜景は見事でした。マイナス15度以上に冷え込み寒いですが、山頂で迎えた新年は晴天。たった2人で展望をほしいままにして下山。途中、ヒタタケ、ナメコ(凍って石のように硬い)の思いがけない収穫があり、のんびり下った元日でした。

今年は、夕張岳、天塩岳など、出来ればペテガリやクワウンナイ川などと早くも北海道の山に思いを馳せています。(福井市O・Y、O・Tさん)

NO.137今受け取りました。有り難うございます。そしてご苦勞様です。1頁目の第一印象が、新しい年が明るく開けていく暖かみを感じさせる素晴らしさですね。みな子さんの爽やかな笑顔と和服姿もとてもよいですね(*^_^*)。また、銀河通信のファンの広がりも仲間が増えて嬉しいですね。今年も頑張ってください。楽しみにしております。

(札幌市H・Nさん)



イソサンヌプリ踏査を一緒に歩いた鈴木美紀さんと(撮影:長谷川雄助さん)

銀河通信届くのが楽しみです。山、映画、自然保護、高山植物盗防ネットなど幅広いジャンル、大変でしょうが頑張ってください。(芽室町 S・Rさん)

山や川に触れる機会がないもてない私は銀河通信を通して自然に触れているのです。みな子さんの活動を嬉しく読ませていただいています。

(札幌市 T・Tさん)

80歳を目前に、足腰の弱りを感じます。小2の孫(男児)が生活を共にしているといつ面倒をみることになります。楽しい話題をよろしくお願いします。

(京都市 K・Uさん)

2/20付民医連新聞の映画紹介(スタンド・アップ)がとても良かったです。簡潔でいて内容の深さがわかり感動しました。必ず観に行こうと思わせる優れた紹介文でした。

(札幌市 M・Aさん)